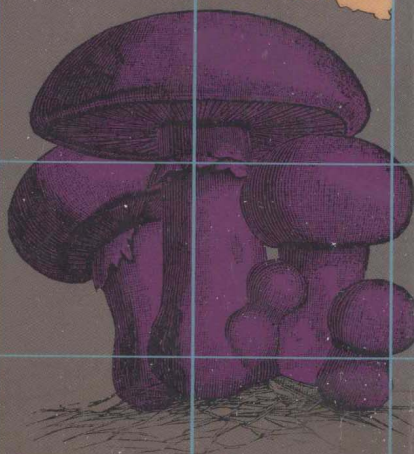
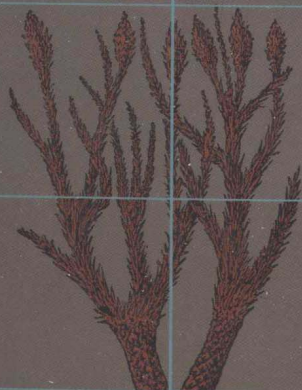


メタモルフォセス群島

筒井康隆



M E T A M O R P H O S I S



新潮社

メタモルフォセス群島

筒井康隆



メタモルフオセス群島（くんとろ）

一九七六年二月二〇日発行
一九七九年六月五日一一刷

著者 筒井康隆ついでやすたか

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

振替東京四一八〇八

印刷 東洋印刷株式会社

製本 神田加藤製本

定価 七八〇円



© 1976 Yasutaka Tsutsui
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

メタモルフォセス群島 目次

平行世界	定年食	喪失の日	走る取的	五郎八航空	雀りあい
135	115	91	61	37	7

母親さがし

157

老境のターザン

171

こちら一の谷

187

特別室

209

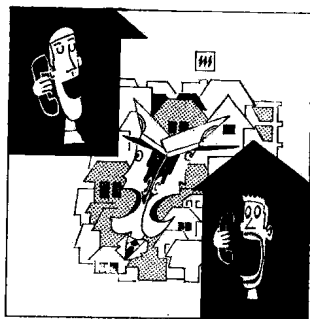
メタモルフォセス群島

229

裝幀・挿画 真鍋 博

メタモルフオセス群島

筆
り
あ
い



会社から帰ってくると、警官隊が家を取り囲んでいたの、おれはびっくりした。「何ごとだ」「来ちゃいかん来ちゃいかん」と、警官のひとりが道路ぎわへおれを押しやった。「まわり道をして帰ってください。危険です」

「まわり道なんてどこにもありません。わたしの家はあれです」おれは分譲住宅地の小さな二階建てを指してそういった。

「え。じゃあ、あなたがご主人ですか」

若い警官のその声を聞きつけ、報道関係者数人がわっとおれの傍へ寄ってきた。

「ご主人ですね」ひとりがマイクをおれの口もとにつきつけた。「ご感想をひとこと」

おれは混乱して眼をしばいた。「驚いております」

「もちろん、そうでしょう。奥さんとは、結婚されて何年になりますか」

「七年ですが」おれの足が不安で顫えはじめた。「家内が、何かやったのですか。どんな悪いことをやったのです。家内は決してそんな、大それたことをする女ではありません。おとなしい、いい女です。貞淑で、美人で、頭が良くて」

「ではまだ、何もご存じありませんでしたか」記者たちは顔を見あわせた。「奥さんが悪いことをなさったわけではないのです」

「では、息子ですか」おれは一瞬からだをしゃちょこばらせてから、首をかしげた。「でも、お

かしいな。息子はまだ四歳だ。そんな大それたことのできる年齢じゃないのだが」

「あなたの早とちりは、われわれ以上だ」記者のひとりがあきれ返ってそういった。「脱獄囚が、あなたの家に逃げこんで立て籠ったのです」

間髪を入れず、もうひとりの記者がまたマイクをつきつけた。「ご感想をひとこと」

「そうでしたか。それで安心しました」マイクに向かってそう言うてから、おれはとびあがった。「では、では妻と息子は」

「人質にされています」気の毒そうな顔つきを作って、記者のひとりがそう教えた。

「ご感想をひとこと」

またもやマイクをつきつけた記者を、別の記者がたしなめた。「まあ待ちなさいよあんだ。事情を知らない人にそんなにいいそいで感想を訊ねたって、しかたがないじゃないか」

記者同士で喧嘩しはじめた。

「うるさい。七時のニュースに間に合わせるんだ」

「勝手なことをいうな。おれたちはもっと長い談話をとりたいんだ」

「そんな暇はない」

「もっと落ちつかせてあげようぜ」

とても落ちついてなどいられない。

「待ちなさい。どきなさい。取材はあとにしなさい」警官隊の隊長らしい男がやってきた。「ご主人ですか。わたしは県警本部の百山といひます。事情を申しあげますと、本日の昼過ぎ、刑務所から小古呂吾朗という懲役二十年の殺人犯が脱走しました。この小古呂という多血質の兇悪犯は、刑務所の近くの交番に押し入り、可哀想な警官の首を絞めて拳銃を奪い、その哀れな警官を射殺したのです。小古呂は以前から女房と餓鬼に会いたがっていました。小古呂の女房は美人

で、小古呂が刑務所へ入ったすぐあとで再婚の話があり、今その縁談が進んでいるまっ最中です。刑務所の中にいてこの噂を聞いた小古呂は気が気でなく、ついに今日の犯行に及んだものと思われます。小古呂の女房の家はこのひとつ東の町にあり、われわれ警察の者は小古呂が必ずそこへやってくるものと思い、家の周囲で待ち伏せしていたのです。ところが長い道のりを走破し、ひと眼しので会いにきた小古呂は、隠れかたのへたくそな警官たちの姿を発見して逆上し、かんに怒ったのです。われわれに追われ、彼はあなたの家に逃げこみました。そしてあなたの奥さんと息子さんを人質にし、自分の女房と餓鬼に会いたいからここへつれてこい、つれてこないとかのふたりを射殺するといきまいています。こら」だしぬけに彼は怒鳴った。

おれはとびあがった。「すみません」

「いや。あなたに怒ったわけじゃない。こらそのカメラを持った二人。勝手に家に近づいちゃいかん。犯人が逆上するじゃないか。馬鹿。ええと。どこまでお話しましたっけ。そうそう。

そこでわたしたちは小古呂の女房と餓鬼をここまでつれてこようと思いました。ところが小古呂の女房はすっかりおびえてしまっておりまして、小古呂に近づいたりしようものなら自分が射殺されてしまうといって、いくら説得しても家から出たがらないのです」

「で、警察としてはどんな対策を立てているのです。今、何をしているところですか」

「ですから今、困っているところです」

「それで、それで、わたしの妻と息子は」犯人から痛い目にあわされているのでなければいいが、そう思ったただけでおれの視界は、たちまち涙でぼやけた。「まだ無事です。犯人が立て籠ってから、もう何時間ぐらいいになりますか」

「おっつけ二時間です。あなたの勤務先を調べるのに手間どり、やっと会社へ連絡した時は、あなたはもう退社されたあだったのです。奥さんと息子さんの声は、ついさっき電話で確かめま

した。まだご無事です」

「まだ無事だとは、なんて乱暴ないいかたです」おれは泣きながらも聞き咎めた。「まるで、もうすぐ無事でなくなるみたいじゃありませんか」

「あ、失礼。ずいぶん長い間ご無事です」

「長いあいだ無事であつてはいけないみたいです」

「すみません。口不調法なもので」

「まあ、そんなことはどうでもよろしい。すると、その小古呂という男とは、電話で話しあうことができるのですね」

「はい。それはできます」百百山というその警官隊の隊長は、なぜかひどく得意そうに答えた。

「外部から野次馬がお宅へ電話をかけたたりして小古呂を不必要に刺戟するのを避けるため、電話線はいったん切断しましたが、その後新たにその前線本部へお宅との直通電話を一台架設し、小古呂と連絡がとれるようになっていきます」

「その、前線本部というのはどこですか」

「その路地に停めてあるパトカーの中です」

「では、小古呂と電話で直接話をさせてください。わたしが説得してみます」弁舌には自信があった。「学生時代、弁論部のキャプテンをしていましたから」

「ははあ。弁論部ですかあ」百百山は急に困りきった表情をし、救いを求めるような素振りや周囲を見まわした。「あまり弁舌さわやかに説得されると、かえって犯人を怒らせることになると思うんですがねえ。なにしろ小古呂はひどい吃りくどで、お喋りしゃべりや演説のうまい人間には憎悪に近い劣等感を持っていますから」百百山はおれの全身を睨めまわした。「それにあなたはたいへんな好男子で、おまけにスマートだし」

「それは電話じゃ、わからないでしょう」

彼は強くかぶりを振った。「いやいや。あいつはあなたのような、いい家庭を持ち妻や子に愛されているエリート・サラリーマンに対して猛烈な反感を持っていますから、あなたから電話がかかってきたというだけでかっと逆上し、あなたの奥さんと子供をぶち殺します」

「ぼくはエリートじゃないですよ」

「いや。絶対にそうです」百百山は決然とうなずいた。「顔と服を見ればわかります」

大企業の社員に変な複合観念コンプレックスを持っているのは、どうやら百百山自身らしい。

「では、では、ぼくにできることは何もないのですか」おれはおろおろ声でそういった。顔が歪ゆがんでいくのを、どうすることもできなかった。「ここでこうして、じっと成り行きを見まもっているしか他にすることは何もないのですか」

自我が崩壊しそうになっているおれの様子を見て、百百山の眼には、きら、と優越感がひらめいた。小気味よげに唇の端を吊りあげ、彼は喜色を満面に浮かべてうなずいた。「警察にまかせておきなさい」

その顔は、いかに好男子のエリートとてこうなっては手も足も出まいと思ひ、面白がっている顔であった。おれは一瞬、眼の前にいる百百山が犯人の片割れであるかのような気がした。百百山もおそらく、おれに対して一瞬加害者の快感を覚えたに違いなかった。

警察にまかせておけといったって、その警察は何もせず、困っているだけではないか、そういつて詰たづねた時、さっきおれにマイクをつきつけたあのせつかちな放送記者が横から話に割りこんできた。

「もう、お話はすみましたか」

百百山がうなずいた。

記者はまた、おれの鼻さきへマイクをつき出した。「ご感想をひとこと」

他の記者たちも、おれの周囲に寄ってきてメモ用紙をとり出した。

「犯人の、小古呂という人に同情します」おれは考え考えそういった。「妻や子に会いたいという気持は、わたしにはよくわかります。家族がはなればなれで暮さなければならぬ辛さなんて、わたしには想像もできません。小古呂が刑務所を脱走する気になったことも、彼と同じように妻や子を愛しているこのわたしには、痛いほどよくわかるのです」

記者のひとりが眼を丸くした。「あなた。それ、本気で言ってるんですか」

マイクを握っている放送記者が唾を吐き出して怒鳴りはじめた。「嘘にきまつてるじゃないか。このひとは自分の声がテレビやラジオで放送されて犯人に聞かれた時のことを考えて、犯人の共感に訴えかけ奴の同情を得ようとして、それでこんな甘ったるいこと喋るんだ。そうに決っている。このひとはマスコミを利用しようとしてるんだ。おれたち記者やマスコミをなめてるんだ」眼を吊りあげて叫び続けるその放送記者を眺めながら、おれは、こいつらもすでおれにとっ

ては加害者だ、と思った。こいつら、今や、おれの敵だ。

部下の警官たちにてきばきと何ごとか指示をあたえている百百山に近寄り、おれは話しかけた。「小古呂の細君が説得に応じないと言っておられましたか」

「小古呂を説得してくれという説得に、応じてくれないのです」

「ではそれを、わたしが説得してきます」と、おれはいった。「わたしが頼みこめば細君は、兇悪犯の妻としての責任上、また人道上からもういやとは言えないでしょうし、細君が声をかければ、小古呂も気持をほぐすでしょうから」

「それもそうですな」百百山はあたりを見まわし、さっきおれを道路ぎわへ押しやった警官に声をかけた。「おいお前。ご主人と一緒に小古呂の細君のところへ行ってきたくれ」彼はおれに向